

日本簿記学会ニュース

No. 49:7 / 2010

《部会の経過報告・ご案内》

第26回関西部会は、平成22年5月29日(土)に近畿大学(準備委員長:浦崎直浩氏)にて開催されました。詳しい内容は本紙部会記をご覧ください。第26回関東部会は、平成22年7月31日(土)に青森公立大学(準備委員長:池田享誉氏)にて開催される予定です。

《全国大会のご案内》

第26回全国大会を下記の予定で開催いたしますので、お知らせいたします。

開催日	8月27日(金)から8月29日(日)	報告者	佐藤倫正氏(名古屋大学) 藤井秀樹氏(京都大学) 高須教夫氏(兵庫県立大学) 上野清貴氏(中央大学)
場所	京都産業大学(京都市)	懇親会	18時40分～20時10分
統一論題	「資金会計と複式簿記一損益計算、資金計算の並存可能性一」	第3日(8月29日)	
第1日(8月27日)	学会賞審査委員会 理事会	参加者受付	9時00分～
第2日(8月28日)		自由論題報告	9時30分～12時00分
高等学校簿記教育懇談会	10時00分～12時00分	記念講演	13時00分～14時00分
参加者受付	11時30分～17時35分	講演者	戸田博之氏(神戸学院大学名誉教授)
会員総会	12時30分～13時30分	統一論題討論	14時10分～16時10分
学会賞受賞報告	13時35分～13時55分		
報告者	橋本武久氏(京都産業大学)		日本簿記学会第26回全国大会準備委員会 委員長 吉岡一郎
研究部会報告	14時00分～15時10分		
統一論題報告	15時30分～17時40分		
座長	瀧田輝己氏(同志社大学)		

本大会のプログラムは、日本公認会計士協会の「CPE認定研修」として承認されております。

《平成20・21年度研究部会のメンバー追加》

平成20・21年度研究部会のメンバーが追加されました。

簿記実務研究部会テーマ:「新会計基準における勘定科目の研究」 部会長/菊谷正人(法政大学)

追加メンバー:増子敦仁(東洋大学)

《平成22・23年度研究部会の募集》

平成22・23年度の簿記理論研究部会、簿記実務研究部会、簿記教育研究部会を下記の通り募集いたします。申し出は、研究テーマ・メンバーを明記の上、事務局宛にお願いいたします。

- (1) 研究期間は、第26回全国大会(平成22年)会員総会承認から2年です。
- (2) 研究成果の報告は、1年経過後の第27回全国大会(平成23年)における中間報告および第28回全国大会(平成24年)における最終報告の2回となります。
- (3) 研究成果につきましては冊子を作成いただきます。
- (4) 研究部会費は1部会200,000円(年間)です。
- (5) 研究部会メンバーは当学会会員とします。
- (6) 研究部会メンバーの人数に制限はありません。

日本簿記学会第26回関西部会記

近畿大学 浦崎直浩
準備委員長

平成22年5月29日(土)に近畿大学経営学部を当番校として第26回関西部会が開催された。学会当日は、爽やかな五月晴れとなり、参加者は72名に上った。今回の関西部会の統一論題は、「会計制度変革期における簿記研究の課題」とした。

その論題を設定した意図は、社会基盤や法制度の変革に伴って簿記実務にどのような課題が生じ、それに応じて簿記研究に対する社会的ニーズはいかに変化し、それに対して教育の内容や方法をいかに変革すべきか、歴史的な視点、理論的な視点、国際的な視点、簿記教育の視点から検討することにあつた。

また、IFRSが全面採用されることになれば、わが国の簿記実務は今まで以上に大きく変化し、簿記教育のあり方にも多大な影響が予想されるからである。

統一論題のセッション(午後1時~午後5時45分)では、神戸大学の鈴木一水先生の座長の下、次の4名の方々から報告があつた。

- (1) 橋本武久氏(京都産業大学)「会計基準の変更と簿記・会計の変化—その歴史的考察—」
- (2) 和田博志氏(近畿大学)「IFRS時代の勘定体系」
- (3) 菅原 智氏(広島修道大学)「諸外国の簿記教育と会計の国際化の影響」
- (4) 島本克彦氏(兵庫県立姫路商業高等学校)「これからの簿記・会計教育」

橋本氏は、複式簿記を超歴史的・技術的概念と措定し、現行実務で行われている簿記は外発的につまり時代の要請を受けて発展してきた歴史的・経済的概念としての企業簿記と特徴付けられ、近年の会計制度改革の進展によって簿記の会計化が極端に進行していることから、本来の目的である財産管理機能を重視した制度改革や教育の必要性を主張された。

和田氏は、財政状態計算書、包括利益計算書、所有者持分変動計算書、キャッシュ・フロー計算書を基本財務諸表とするIAS1の考え方をIFRS時代(=財務諸表4本化時代)と措定し、我が国制度の株主資本等変動計算書と直接法キャッシュ・フロー計算書がなぜ基本財務諸表となり得るのかを勘定理論的立場から論証

された。

菅原氏は、イングランド、オーストラリア、ブラジル、イタリア、デンマーク、ベルギー、台湾、中国の研究者を対象として、会計の国際化と簿記・会計教育への影響を調査され、①簿記の学習時間が全体的な傾向として減少しており新しい形態の簿記会計教育へ移行する過渡期を迎えていること、②技術・知識の習得を目的とした学習から現場での会計的判断力やコミュニケーション能力(ジェネリック・スキル)の開発を目的とした学習へと移行しつつあることを明らかにされ、簿記会計の自学自習方法の開発と学習意欲を高める工夫が必要であると結論づけられた。

島本氏は、主としてアメリカの高等学校の簿記会計の指導事例に関する研究を踏まえて、「覚える簿記」教育から「よりよく考える簿記」教育への転換を提起し、社会や生活様式の変化も視野に入れた永続する技能つまり問題解決や意思決定に役立つ批判的思考を取り入れた授業方法を行う必要があると主張された。

統一論題の討論会では、教育問題、簿記理論問題に関連する議論が活発に行われた。また、自由論題報告では、足立典昭氏(元大阪学院短期大学)「財産法と損益法の系譜—会計学説史序説の構想(其の一)—」、市川直樹氏(大阪国際大学)「キャッシュフロー計算書の類型」の2報告があつた。統一論題終了後は、近畿大学11月ホール地下の生協食堂において恒例の懇親会が開催された。



オランダのことども

京都産業大学 橋本武久

唐突ですが、コーヒー、ビール、ガラスと聞いて何を思い浮かべますか？オランダとすぐにわかった方はかなりのオランダ通ですね。これらはオランダ語由来の日本語です。簿記・会計に関して言えば、割り勘という意味のダッチ・アカウントが有名ですが、これが本当にオランダ由来であるかどうかは怪しく、和製英語だという意見もあります。まあ、よく知っているようで知られていないワンダーランド・オランダ、というのが実情でしょうか？

こういった背景もあるので、私は、「何でオランダの簿記史を勉強しているのですか？」とよく聞かれ、これまで一生懸命答えてきました。ただもうくたびれて来ましたので、これからは少し格好をつけて、「そこに簿記があるから」とだけお答えしようかとさえ思っていますが、ここは簿記学会ニュース、やはりこれを避けて通ることはできないようです。

ご存知のように17世紀のオランダは世界経済の中心地でありました。会計史家は経済繁栄の中心にはさまざまな新しい経済事象が生起し、それを処理するために簿記技法（それを反映した簿記書）が革新するといった構図を描きます。

そこでこの構図を当時のオランダに当てはめれば、世界初の株式会社オランダ東インド会社が誕生し、これを背景として期間損益計算思考が確立したということになり、それを簿記書に反映し著したのがSimon Stevin、小数点の発見で有名な数学者でもあります。

私は天邪鬼なものですから、こういう話があまりにうますぎないかと疑い細々と研究を続けて来ました。私なりの結論の一端は、Stevinの簿記論に使用される「期間」という概念は継続企業のそれではなく、財政上のものであるということ。そして、彼のアイデアが実際に領土管理に利用され、それをマニュアル化したものが彼の簿記書であったこと。また、彼から遅れて出たWillem van Gezelは19世紀後半から20世紀初頭に確立される物的二勘定学説

の基本構想を200年も早く明示しており、こちらにこそ焦点が当てられるべきだということなどです。

このような結論に至るまでにはいくつかの新しい史料とのラッキーな出会いがありました。その一つは2003年の夏、デン・ハーグにある国立図書館での文献検索中に起こりました。後にStevin最初の著書とわかる、Simonem Stephanum, *Nieuwe Inventie van Rekeninghe van Compaignie, Delft*(1581) (『組合の計算に関する新発明』) というマイクロフィッシュのリストが、偶然、私の目に入ってきたのです。

私は早速これを借り出す手続きをしたのですが、該当部分を探しても出てきません。係の方にその旨を告げたところ、「原本からもう一度マイクロフィッシュを作成しますから2、3週間かかります」とのこと。帰国を2日後に控えていた私は猛然と抗議しました。すると、彼は書庫から原本を持ってきて手にとらせてくれたばかりか、「私の責任でコピーを差し上げます」と言い、なんとその本を目の前でコピーしてくれたのです。

「あんた本当に責任取れるのか？本当に良いのか？16世紀の文献だぞ、大丈夫か！」という心の声を押し殺しつつ待つこと数分、彼は「はい」とコピーを渡してくれました。私は興奮しながら大げさに御礼を言って、「やっぱりだめ、返して」と彼の気が変わる前にいそいそと退散しました。

私はこのときほど「オランダ人は寛容」というステレオタイプな評判を実感したことはありません。しかし彼はその後本当に大丈夫だったのか、あの文献は痛んでいないのだろうか、でもきっと大丈夫だろうオランダだから、と思わせてくれるのもオランダなのです。

私は、このことを思い出すたびに、まだまだ解決すべき問題の多いオランダの簿記・会計史を研究し続けねばとの誓いを新たにしますが、同時に何でもありのワンダーランド・オランダに魅せられている自分に気づきます。もしかするとこれが、私が今もこの研究を続けている本当の理由なのかも知れません。

「替り目」

専修大学 渋谷 武夫

私の昔からの趣味の一つは落語（特に古典）を聞くことである。子供の頃から、三遊亭金馬（三代目）の「居酒屋」,「藪入り」,「孝行糖」や古今亭志ん生（五代目）をラジオやレコードで聞いていた。なかでも志ん生は八代目桂文楽とともに昭和の名人とされる。

志ん生の噺で有名なのは「お直し」,「火焰太鼓」,「黄金餅」などであろう。しかし、私が子供のころに聞いたもので印象に残っていたのは「替り目」である。志ん生の「替り目」については戦前から現在まで多くのレコードやカセット, CDが出ている。この噺は志ん生以外の噺家はあまり演じないし、私は聞いたことがない。しかし、この噺の題目は、その時々で違っている（昭和10年:「元帳」[ポリドール], 18年:「亭主関白」[テイチク], 26年:「元帳」[テイチク, 私が子供の頃, 自宅のレコードで聞いたもの]）。その後、今日まで志ん生版のカセットやCDが数多く出ている（56年:「替り目」[日本コロムビア, 現在, 私が所有しているもの。31年の収録], その他）。

「替り目」のあらすじは次のとおりである。前半は自宅前での酔っ払い亭主と車夫（人力車）とのやり取り, そして後半は帰宅後の亭主と女房とのやり取りで、全編が面白い掛け合いに満ちている。酔って帰宅後、亭主が奥さんにさんざん威張り散らしてさらに酒を飲むことになり、ツマミとしておでんを奥さんに買いに行かせるところから、「落ち」に入る。

「何してんだ。鏡台の前で。お前なんか手と足だけあって俺の用だけしていればいいの。ぐずぐずしているうち（家）に置かないよ。こんないい夫を持ちやがって。……ハハハ、行っちゃったよ。しかし、なんだかんだ言ったって女房ほどありがたいものはないね。近所の人もそう言ってるよ。お前さんとこのおかみさんは器量よしで、働き者で、お前さんには過ぎものだよ。おれもそうだと思うけど、そう言っちゃっちゃしょうがないから、出てゆけ、このお多福め、なんて言ってるけど、腹の中では涙を流して詫びているよ。あ、まだ行かねえのか、さあ、大変だ、これは元帳を見られちゃった。」

この落ちは昔レコードで聴いたもので、いまだに、記憶に残っている。

簿記を学ぶまでは元帳の意味はわからなかったが、その時々で志ん生のいい方は少しずつ異なっている。手持ちのCDやカセットでは、「あ、まだ行かねえのか、おめえは。替り目でございます。」となっている。「あ、まだ行かねえのか、元を見られちゃった。」というのものもあるようだ。

噺の「落ち」からすれば「亭主関白」というのはわかりやすい。また亭主が威張っていた前半と感謝の本音を聞かれた後で立場が逆転するという点では「替り目」でもおかしくない。しかし、この話にはまだ先があって最後の落ちが「お銚子の替り目」にかかるとは（実際はここまでやらないし、聞いた人はいないだろう）。それでは志ん生はなぜ「元帳」といったのだろうか。もちろん彼は簿記や会計には全く無縁である。元帳という言葉は一般に（簿記以外で）どう解釈されているだろうか。「広辞苑（第四版）」では、元帳は、簿記の用語としてのみ説明されている。志ん生（したがって世間的に。少なくとも戦前や戦後すぐ。）は、元帳とは、一番大事な部分、あるいはおおもと、本音、という意味で理解していたのかもしれない。

ところで「学生の簿記離れ」が言われて久しい。日ごろの努力の積み重ねを要求される簿記は、学生には面倒な科目であることも一因かもしれない。そんな学生たちの興味を引くために落語の話を簿記・会計の講義に織り込んでみたいと思ったこともある。

経済学では「花見酒」（笠信太郎『花見酒の経済』で引用）や「千両ミカン」など結構使えるものがある。「時そば」（関西では「時うどん」）などは、「時そば外人」の見出し（釣銭詐欺）で新聞に載ったことがある。

もう一度、落語全集を読みなおし、簿記・会計の講義やテキストに使えるようなネタを探してみたいと思っている。

発行所
編集兼
発行人

日本簿記学会事務局

連絡事務所

〒101-0021 東京都千代田区外神田5-1-15

株式会社白桃書房

e-mail boki@hakutou.co.jp